

## 『御抄』の『正法眼蔵』解釈

## —数量表現について—

## 一 はじめに

『正法眼蔵』には、数量を表わす表現が多く用いられている。勿論、四大・五蘊・十二処・十八界等、術語として本来の意味を有するものもあるが、三寸・七尺八尺・一枚二枚等のように、術語ではないが、しかし単なる数量を表わしているのではないと思われる表現も少くはない。ここで取り上げようとする「数量表現」とは、前者ではなく後者のような場合を言うのである。使用される数字も、一から十、或は一より小さく半、或は百千万という非常に大きな場合もある。だが『御抄』（『正法眼蔵抄』）は、心ずしもその数量通りの意味には解釈していないようである。本稿では、小さな数量から順次取り上げ、その数字が一体どのような意味を表わそうとしているのか、『御抄』の解釈を通して考察することにした。用例は多くあるが、紙幅の関係上、主なもののみにとどめる

ことにする。

以下の引用文中、『正法眼蔵』は大久保道舟編『古本校定正法眼蔵』に、『正法眼蔵抄』は『曹洞宗全書』註解一・二によった。

伊藤秀憲

## 二 数量表現の用例

## (一) 半

「半」と言えば、「二」或は「全」（全体）の半分ということであり、「二」「全」が完全な様を表わすとすれば、「半」は不完全な様を表わしていると言わなければならない。では、『御抄』はこの「半」をどのように解釈しているのだろうか、次にその用例を見てみることにしたい。

## (1) 半人

この宗旨を挙括するときは、ただ仏祖のみなり。さらに半人なし、一物なし、一事未起なり。（仏教 三二三頁）

是ハ此理ヲアクルトキハ、仏祖ノ外ニ又交物ナキ所ヲ、半人ナ

シ、一物ナシト云也、只仏祖ノミアルヘキ也、唯仏与仏是也、  
(抄 一・七一七頁下)

仏祖のみで仏祖の外に交るものがないこと(唯仏与仏)を述べるがために、「半人」さえも、又次の項の「一」と関係あるが、「一物」さえも仏祖の外にはいないと言っている。この「半」は、仏祖に相對するものなきことを強調するため用いられたものであり、特別な意味はないと言える。

(2) 半枚

いはんや雲居高祖いはく、たとひ仏法辺事を学得する、はやくこれ錯用心了也。しかあれば、半枚学仏法辺事、ひさしくあやまりきたること日深月深なりといへども、これ這皮袋に撞入する狗子なるべし。知而故犯なりとも有仏性なるべし。(仏性 三三〇三三頁)

半枚学仏法辺事、ヒサシクアヤマリキタルト云ハ、アヤマリニテナシ、半枚ト云ヘハ、全枚ノアリテ不及所ヲ半ト云ニアラス、ユヘニ這皮袋ニ撞入スル狗子ナルヘシ、知而故犯也トモ、有仏性ナルヘシト云也、但半枚ト云、半ノ字、非無謂、錯用心ト云方ト、知而故犯也トモ有仏性ナルヘシト云方トヲ、分テ半枚トハ仕フナリ、(聞書 一・一二二頁下)

半枚と言っても全枚に対する半枚ではないことは『聞書』に明らかである。ただここでは、錯用心という方と、知而故犯也とも有仏性なるべしという方とを分けて半枚と言っているのだと積している。

(3) 半到・半不到

いふべし、意句半到也有時、意句半不到也有時。(有時 一九四頁)  
半詞出クレハトテ、不滿ニ対シタル半トハ不可ニ心得、有時ノ半ナルヘシ、(抄 一・四五七頁下)

「半到・半不到」とあっても、半に特に意味があるのではない。そのどちらも、有時にほかならないことを述べんとしているのである。

(一) 一枚

(1) 一枚

(a) 動ずるはいかゞせんといふは、動ずればさらに仏性一枚をかさぬべしと道取するか、動ずれば仏性にあらざらんと道看するか。

(仏性 三三三頁)

動ヲ仏性ト心得ル所ヲ、暫仏性一枚ヲカサヌトハ可ニ心得ニ敷、

(抄 一・一一四頁下)

(b) 尽十方界、在自己光明裏。眼皮一枚、これを自己光明とす。(十方 四七七頁)

此自己尽十方界ノ自己ナルヘシ、此自己ノ上ノ眼皮一枚也、如此ナルユヘニ、尽十方界ト、自己光明裏ト只一物也、是ヲ自己光明トスルナリ、(抄 二・二四七頁上)

(a)は動と仏性とが異なることを、(b)は尽十方界と自己光明裏とが異なることを「一枚」なる語が表わしている。このように、二者が異なるのではなく不二同一であることを「一枚」と言っているのである。

(2) 一句・一偈

(a) 或從知識して一句をきき、或從經卷して一句をきくことあるは、すなはち得授記なり。(授記 一九六頁)

如レ文、一句ヲ見聞スルヲ受記トハ、打任ハ難レ云、但仏祖ノ一句ト云詞ハ、イカニト可ニ心得<sup>レ</sup>ソ、一句ナレハ少ク不足ニ、万句ハ多満足シタリトハ不可<sup>レ</sup>心得<sup>レ</sup>、仏祖ノ一句ノ外ニ、惣カケタル義不可<sup>レ</sup>有、此一句半偈授記ナルヘキ道理必然ナリ、(抄 一・四六六頁上)

(b) 聞法華經はたとひ甚深無量なるいく諸仏智慧なりとも、きくにはかならず一句なり、きくにはかならず一偈なり、きくにはかならず一念隨喜なり。(授記 二〇〇〜二〇一頁)

是ハ如レ文、詮ハ法華經ノ無量無辺ト云モ、只一句一偈ナルヘシ、一句一偈ハ不足ニ、無量ハ多カルヘシト不可<sup>レ</sup>心得<sup>レ</sup>、一句ノ外ニ更アマル一法アルヘカラス、一念隨喜又同、(抄 一・四七六頁下〜四七七頁上)

(c) しかあればすなはち、乃至聞一偈一句受持するは、得見釈迦牟尼仏なり。亦見多宝仏なり、見諸分身仏なり。(見仏 四八五頁)  
今所レ云ノ一偈一句非ニ凡見一偈一句也、尽十方界一偈ナリ、尽十方界一句也、此道理ヲ受持ストハ仕也、此一偈一句ノ道理ヲ得見釈迦牟尼仏トモ、乃至諸分身仏トモ談也、(抄 二・二七二頁下)

一句は少なく、万句或は無量句は多いと考えるが、そうした考えを(a)(b)の『抄』は否定している。一句のほかは一法があるのではないから、いわゆるの「一句、二句、……」とい

う場合の「一句」ではない。仏祖の説かれた一句にすべてが撰されていると解釈しており、(c)もまた、「尽十方界一偈ナリ、尽十方界一句也」、尽十方世界が即ち一偈・一句にほかならないと説かれる。

(3) 一丈・一尺・一寸

(a) 雪峰、示衆云、世界闊一丈、古鏡闊一丈、世界闊一尺、古鏡闊一尺。(以下略)(古鏡 一八四頁)

此詞不可<sup>レ</sup>被ニ心得<sup>レ</sup>、世界闊一丈ト云事、打任テ、アルヘキ儀ニアラス、古鏡闊一丈トアリ、是又不ニ打任<sup>レ</sup>、彼是詞、耳目驚カレヌヘシ、タタシ此丈尺ノ様、於ニ仏法上ニ所談ナルウヘハ、頗始テ非<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>驚、勿論事也、丈尺サラニ長短ニカカハルヘカラス、(抄 一・四二二頁下〜四二三頁上)

一丈ノ詞ハ、世界ト、古鏡トノ、親切ナル事ヲアカシ、一尺ノ詞ハ丈尺ノヒトシク、親切ナル所ヲイフ也、(聞書 一・四四〇頁上)

(b) 大慈實中禪師いはく、説得一丈、不如行取一尺。説得一尺、不如行取一寸。これは、時人の行持おろそかにして、仏道の通達をわすれたるがごとくなるをいましむるにたりといへども、一丈の説は不是とはあらず、一尺の行は一丈説よりも大功なるといふなり。(行持上 一三三頁)

此詞ヲ打任テ心得ニハ、一丈ヲ説得スルヨリモ、一尺ヲ行取スルハ、マサリタルヤウニ思付タリ、今義ハ非<sup>レ</sup>爾、其故ハ一丈モ行持ノ上ニ仕フ、一丈一尺モ乃至一寸モ行持ノ上ニ談スル尺寸ナリ、ユヘニ勝劣高下ノ論ニ不可<sup>レ</sup>及、而今ノ草子ニ一尺ノ

行ハ、一丈ノ説ヨリモ大功也ト云ヘハ、猶勝劣アルニニタリ、前後ノ参差ニモ聞タリ、是ハ行持ト云草子ノ上ナルユヘニ、暫一尺ノ行ハ一丈ノ説ヨリモ大功也ト云トモ、サレハトテ始終更勝劣淺深ノ義不<sub>レ</sub>可有、随上ニ一丈ノ説ハ、不是トニハアラスト被<sub>レ</sub>積分明也、(抄 一・三五五頁下)

(c) 精進力は、説取行不得底なり、行取説不得底なり。しかあればすなはち、説得一寸、不如説得一寸なり、行得一句、不如行得一句なり。(三十七品菩提分法 五〇九頁)

又説<sub>二</sub>得一寸<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>得一寸<sub>一</sub>也トハ、本ノ詞ハ一丈ヲ説得セムヨリモ、不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>得一寸<sub>一</sub>トアリ、是ヲ人ノ心得様ハ、一丈ヲ説ヨリモ先只一尺ヲ説得シテアリナムト云様ニ心得也、非<sub>レ</sub>爾、此一丈一尺、只同タケナルヘシ、今ノ説得一寸、不如一寸ハ、今一重マキル方ナク、被<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>タリ、此一寸如<sub>二</sub>前云<sub>一</sub>ノ説行程ノ一寸ナルヘシ、行得一句、不如行得一句トハ、是又説得一寸ノ同心ナルヘシ、一寸ト一句トノ替目許也、寸与<sub>レ</sub>句更不<sub>レ</sub>可有<sub>二</sub>差別<sub>一</sub>、(抄 二・三五五頁上<sub>下</sub>)

(a) では「世界闊一丈、古鏡闊一丈」「世界闊一尺、古鏡闊一尺」というように、相対する二つ、世界闊と古鏡闊とに同一単位の同一数量を当てている。これは『聞書』が、「一丈ノ詞ハ世界ト古鏡トノ親切ナル事ヲアカシ」としているように、相対する二つが異なるものではなく、同一であることを表わしているのであって、丈尺の長短には関係がないと考えてよいであろう。

これに対して(b)では、大慈寰中禅師のことばが引かれるが、

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

(a)とは異なり、単位が異なっている。そのことばは、「一丈を説得せんよりは、一尺を行取せんに如かず。一尺を説得せんよりは、一寸を行取せんに如かず」(原漢文)であり、又本文でも、「一尺の行は一丈説よりも大功なるといふなり」と述べている。しかし、これは、行持の巻であるから行持の大功なることを述べようとしているのであって、行と説との間に勝劣があるのではないと『抄』は説いている。このように丈尺寸の単位の異なりを全く無視し、すべて同じであるとするのは、『御抄』の解釈の特色の一つであると言ってよいであろう。

(c)は(b)の「説得一丈、不如行取一尺」「説得一尺、不如行取一寸」が、「説得一寸、不如説得一寸」「行得一句、不如行得一句」と改めて説かれている。(b)では説と行とが比較して述べられていたが、(c)では説と説、行と行とが並べて、しかも同一数量の一寸、一句が付されており、これは、どのように解すべきであろうか。「説得一尺、不如行取一寸」であるならば、説よりも行の方が勝れていることを示しているが、どちらも「説得一寸」であるということとは、説のみであるということを表わしていると考えてよいであろう。同様に「行得一句、不如行得一句」は、行のみなることを示していると言える。

(4) 一片石

空是空の空といふは、空裏一片石なり。(仏性 一九頁)

是モ空ノ内ニサル一ノ石ナムトノアラムスル様ニ聞エタリ非  
爾、只空ノ無邊際一トヲリカ如此イハルルナリ、此石モ則仏性  
ノ一片石ナルヘシ、此裏モ対ニ表裏ニタル裏トハ不レ可ニ心得、  
（抄 一・四七頁上〜下）

空裏一片石ナリトイフハ、空与レ色ニニキコユ、シカニハアラ  
ス、タタ空裏トイヒツルトキニ、空ナルヘシ、タタ一ト可ニ心  
得、又空裏トイヘハ石モアレ、コノ石ハ空ノ上石ナレハ空トト  
ルヘシ、空ノ外ノモノニアラス、空裏一片空トモイヒツヘシ、  
又空ニマシハルモノアルヘカラス、一片石ノ空ナルヲ、空裏一  
片石トモイフ、（聞書 一・五〇頁上〜下）

「空裏一片石」と言っても、空と石とがあるのではない。  
『抄』には「空ノ無邊際一トヲリカ如此イハルルナリ」とあ  
り、『聞書』にも「空ニマシハルモノアルヘカラス」とある  
ように、空に相對するものがなく、空のみなることを「一片  
石」と言っているのである。

(5) 一条鉄

脱落は一条鉄なり、一条鉄は鳥道なり。（仏性 二七頁）

仏性ハ又尺界スヘテ客塵ナシ、直下サラニ第二人ニアラスト、  
一切衆生悉有仏性ノ段ニアリ、無客塵無第二人ノユヘヲ一条鉄  
トイフ、二モ、三モ、モノノアルヘカラサル道理ヲ如此イフナ  
リ、（聞書 一・八一頁上）

「一条鉄」とは一本の鉄筋である。客塵も第二人もなく、  
仏性のみであることを「一条鉄」の語は表わしており、それ  
が脱落であると言っているのである。

(6) 一知

いまの「一知」わづかに使用するは、尺界山河を拈来し、尽力して知  
するなり、山河の親切にわが知なくば、一知半解あるべからず。  
（坐禅箴 九九頁）

一知ワツカニ使用スト云ハ、此知ハ我等カ見カト覚ヘタレトモ  
不レ然、一知トモ不触事ナル所ヲ一ト云ナリ、一知半解ト云フ  
知ハサキノ一知ヲサス也、凡夫ノ慮知ニ非ス、全体知ヨリ外ニ  
物ナキユヘニ一知ト云フ、（聞書 一・二七七頁下）

知と言っても、我々の慮知分別を指すのではなく、不触事  
なるところを言うのである。不触事なるところとは、我々の  
分別に依っては捉えられないもの、即ち「尺界山河」そのも  
のであり、それが知であって（拙稿『正法眼蔵』における三界  
唯心の解明）『宗学研究』第一八号所収 一六七頁参照）、知のほ  
かには何もなく、あるのは知のみであるから「一知」と言う  
のである。

(7) 一草

まさにしるべし、空は一草なり、この空かならず華さく。百華に  
華さくがごとし。（空華 一一二頁）

其中ニ今ノ空ハ一ノ草也、此空ニ必花サク、百華ニ花ノサクカ  
如シトハ、此空ノ道理、百華ニ花ノサクカ如クアルヘキ中ニ、  
此空ハ一草也トハ云也、但此ノ草ト談スル時、余草不レ可レ残、  
百華ト談セムトキ、空ノ一草不レ可ニ各別ニ也、只所詮、妄見ノ  
方ノ空花ヲ、詞ヲ不レ改シテ、仏道ニ談スル空花ノ理ヲサマサ  
マ被レ積ナリ、（抄 一・三一四頁下〜三一五頁上）

空を「一草」と言えば、一草に相對する草はなく一草のみである。逆に百草と言つても、空の一草もそれとは別にあるのではない。即ち、すべてが草に撰されていることを「一草」と述べていると言えよう。

(8) 一槌

ただまさに一槌千当万当なり、千槌万槌は一当半当なり。(夢中説夢 二四二頁)

仏法ノ上ノ一槌ノ道理ハ、千当万当ナルヘシ、千槌万槌ハ一当半当ノ理ナリ、仏法ノ関振子程ノ一槌ナルヘシ、此一槌ニアタラスト云物不可有也、(抄 一・五七七頁上)

『抄』は「此一槌ニアタラスト云物不可有也」と述べているが、これは、夢中説夢の巻であるから、法界のすべてが夢だということである。「千槌万槌は一当半当なり」とは、たとひ千槌万槌しても、当るのは一半のみ、即ち夢のみであるということを表わしていると言えよう。

(三) 一・両 (二)

(1) 一・両 (二)

(a) 梅開に帯せられて万春はやし。万春は梅裏一両の功德なり。(梅華 四六二頁)

万春ハ梅裏一両ノ功德也トハ、打任ハ、春ハ総ニテ梅花ハ其内ニサク花トコソ被ニ心得ニヲ、此梅花ノ理ハ、梅裏一両ノ功德ニテ、万春ハアル也ト被レ釈、其ユヘハ以ニ万春ノ当体ハ梅花ト談ユヘニ、万春ハ梅裏一両ノ功德ト云ハルル也、一両ノ詞、又ア

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

マタアル中ニ、ワツカニ、其内ノ一両ト云ニハアラス、梅花ノ姿ヲ一両ト云也、(抄 二・二二六頁下)

(b) みな与仏同参なり、与山河大地同参なりといへども、なほこれ許多手眼の一二なるべし。(観音 一七四頁)

ココニ猶是許多手眼ノ一二ナルヘシト云ヘハ、許多手眼ハマサリテ、今右ニ所レ挙、真覚大師、麻谷臨濟雲門百丈、乃至楞嚴法花等ノ観音ハ、猶許多手眼ニハ不レ及、纔一二ナルヘシト云ヤウニキコユ、非ニ其義、此一二ハ全一全二ナルヘシ、非ニ数量一二ナリ、是ハ祖師等中ニ被レ談観音、人人ノ詞ヲ被レ挙也、上ニモ許多ノ一一也トアリ、許多ノ一二ナルユヘニ、非ニ数量一二也、(抄 一・四〇〇頁下)

(a) は梅華の一両の中に万春が撰せられていることを示しており、この一両の梅華が春そのものだと言っているのである。(b) は許多手眼の一二にすぎないというのではなく、祖師等が説かれた観音も、それはそれで全一全二の観音であるとしているから、この一・二は数量を表わしているのではないことになる。

(2) 一月両月

一月両月にあらず、千月万月にあらず。月の自己たとひ一月両月の見解を保任すといふとも、これは月の見解なり、かならずしも仏道の道取にあらず、仏道の知見にあらず。(都機 二〇六頁)

タトヒ一月両月ノ見解ヲ保任スト云トモ、是ハ月ノ見解也トハ、此一月両月ノ詞モ只月ノ上ノ莊嚴功德ナルヘシ、月ノ上ノ保任ニテヲキテ、仏道ノ道取ニ非、仏道ノ知見ニ非トテ、月ノ一

法独立ノ上ノ莊嚴ニテヲカム、此上ハ仏道ノ道取、仏道ノ知見トハ、シハラクイハシト云心地ナリ、(抄 一・四九九頁下)

都機の巻では、すべてが月であることを説くのであるから、一月両月もその月の上の莊嚴功德であると『抄』は説いている。それ故、一両には特に数量を表わす意味はないと言える。

(3) 一面目・両頭

古心を保任する、古仏を保任する、一面目にして両頭保任なり、  
両頭画図なり。(古仏心 八〇頁)

古心ヲ保任スル、古仏ヲ保任スル一面目トハ、心与レ仏総非ニ別物ニ所ヲ一面目トハ云也、然而又古心ヲ保任シ、古仏ヲ保任スルト云詞ノ出クル所カ、両頭保任トモ、両頭画図トモ、シハラク云ハルルナリ、(抄 一・二二五頁上)

「古心を保任する」と「古仏を保任する」というように、古心と古仏とあるから「両頭保任」「両頭画図」と説かれる。しかし、心と仏は異なるのではなく同一であり、それを「一面目」と言うのであると『抄』は解釈している。

(四) 一・二・三・四……

(1) 一条两条三四五条

自己に参学せざるゆゑに、崩壊の正当恁麼時は、一条两条、三四五条なるがゆゑに無尽条なり。かの条条、それ寧無我身なり。

(古仏心 八一頁)

一条两条等ノ詞ハ、只次第ニ無尽条ト云事ヲ云アラハサム詞ナリ、所詮崩壊ノ姿、無尽際ナルヘシ、又一条两条三四五条ヲ以

テモ崩壊トトルヘシ、カナラス無尽際ヲ極員数ト一条乃至三四五条等ヲ以テ少トトルヘカラス、一条乃至三四五条モ、無尽際モ、只同心ナルヘシ、イツレモ崩壊ノ道理ナルヘシ、彼条条ノ姿ヲ寧無我身トハ可レ云ナリ、(抄 一・二二七頁上)

世界が無限に崩壊する様を説くにあたり、一条两条三四五条のことはを用いているのであるが、ただこれのみにとどまるのではなく、無尽条を表わしている。

(2) 一枚二枚三箇四箇

この正当時、まさしく尽十方界を覩見すれば、未曾見の様子あり。いはゆる、尽十方界を一枚二枚、三箇四箇拈来して、開方便門ならしむるなり。(諸法実相 三六九頁)

尽十方界ヲ覩見スル人アルヘカラス、此覩見ト云詞ハ、イハユル尽十方界ヲ一枚二枚三箇四箇拈来シテト云詞共ノ、道理ノユク所ヲ覩見トハ仕也、能見所見ノ見ニアラス、一枚二枚ノ詞、不ニ心得ニヤウニキユレトモ、只所詮尽十方界ヲ以テ、一枚二枚トモ、三箇四箇トモ仕也、(抄 二・一一五頁上)

『抄』には「尽十方界ヲ以テ、一枚二枚トモ、三箇四箇トモ仕也」とあるから、この一枚二枚等のことばは、単に数量を表わすのではなく、またこれだけにとどまるのではなく、尽十方界が無限の方便門を開いていることを表わしていると言える。

(五) 二・三……

(1) 二三斛

これを眼睛に団しきたること二三斛、これを業識に弄しきたること千万端なり。(身心学道 三六頁)

所詮以心ノ道理、眼睛(睛カ)トモ業識トモ談スルナリ、二三斛ノ詞立レ耳様ナレトモ、不レ可レ滞ニ一ニ詞、無量也、又眼睛ニ団シ来、業識ニ弄シ来ト云詞ヲ、暫二三斛トモ、千万端トモ仕カ、二三斛千万端只同事也、不レ依ニ数量ニユヘニ、心ノ無辺際ノ道理カトモカクモ被レ仕也、(抄 一・一二四頁上)

二三斛千万端ト云モ、世間ノ員ニ不レ可レ数、仏性ヲ真如ソ、実相ソナムト談スルヲ、二三斛トモ千万端トモ云也、(聞書 一・一三九頁上)

斛は量を表わす単位で、十斗が一斛に当る。しかしここでは、二三斛は数量ではなく無量を表わしており、千万端と同じであるとしている。心の無辺際なる道理がこのように説かれるのである。

## (2) 三尺・二寸

いはゆる坐禅箴の箴は、大用現前なり。声色向上の威儀なり、父母未生前の節目なり。莫謗仏祖好なり、未免喪身失命なり。頭長三尺、頸短二寸なり。(坐禅箴 九八頁)

頭長三尺頸長二寸ト云フ、コレ又カカル物ノアルヘキニアラス、今ノ坐禅人カ世間ノ凡夫ニコトナル所ヲ云フトキ、如此イハルルナリ、(聞書 一・二七六頁上)

『聞書』は、「坐禅人カ世間ノ凡夫ニコトナル所ヲ云フトキ、如此イハルルナリ」としているが、「頭長三尺頸長二寸」という、世間にはありえない姿の表現によって、坐禅人が世

間の凡夫とは異なること(坐禅は凡夫の行ではなく仏行であるから、坐禅人は既に凡夫ではなく仏であると言える)を表わそうとしたものであると言えよう。

## (3) 二寸三寸・七箇八箇

闊はその量を挙するなり、広をいはんとにあらず。闊といふは、よのつねの二寸三寸といひ、七箇八箇とかぞふるがごとし。(古鏡 一八五頁)

(前略)古鏡ノ功德ヲ云フ、総体ナルスカタヲ広ト云、セハキニ対シタル広ニハアラサルヘシ、古鏡ノ上ノ二寸三寸、古鏡ノ上ノ七箇八箇也、(抄 一・四二四頁上)

二三寸ト云ヒ、七箇八箇ト云ハ、員数又広狭ノ分ニテハナシ、三昧モ二寸、陀羅尼モ三寸ト云ハムカ如シ、(聞書 一・四四〇頁下)

古鏡の上の二寸三寸であり、古鏡の上の七個八個であるということは、二寸三寸、或は七個八個の数量には特に意味がないと言える。古鏡の上の変化を表わしたにすぎない。

## (4) 両翼三翼・三足五足

去来は尽十方界を両翼三翼として飛去飛来す、尽十方界を三足五足として進歩退歩するなり。(身心学道 四一頁)

是又不レ可レ有ニ別子細、尽十方界ノ道理、千變万化スル時、如此ノ理現前スル也、(抄 一・一三七頁下)

尽十方界の千變万化する様を、飛去飛来と言ひ、進歩退歩と言ったのであるから、それに関連する語として「両翼三翼」

「三足、五足」を用いたのであって、数量に特に意味はない。

(六) 三

(1) 三枚

大悟三枚を拈来して少迷半枚をつくるなり。（大悟 八五頁）

是ハ大悟与三却迷、至テ親キ時如此云ハルル也、大悟三枚ヲ持テ少迷半枚ヲ作ルトハ、大悟ヲ以テ少迷ヲ作トハ、大悟与三却迷只同物ナル道理ヲ、如此云也、三枚ト云詞ハ、大悟ヲ三枚ト仕フ、少迷半枚モ、迷ヲ半枚ト仕フ、迷悟タカヒニ一物ナル道理分明ナリ、作ト云モ非ニ造作義、大悟与三卻迷ノアハヒヲ作トモ云ナリ、（抄 一・二二九頁下〜二三〇頁上）

大悟三枚をもって少迷半枚を作るとするのは、大悟と却迷とが同じであるということを表わしていると『抄』は解釈している。この解釈に依るならば、三枚・半枚も特にその数量には意味がないことになる。

(2) 三寸

(a) このゆゑに古人いはく、若人識得心、大地無三寸土。しるべし、心を識得するとき、蓋天撲落し、而地裂破す。あるいは心を識得すれば、大地さらにあつさ三寸をます。（即心是仏 四四頁）

或心ヲ識得スレハ大地アツサ三寸ヲマストハ、心ノ究尽スル時ハ、心ノ外ニ齊肩スヘキ物ナケレハ、蓋天撲落シ、而地裂破スト云ハル、山河等ヲ心トトク時、アツサ三寸ヲマスト暫云也、数ノ局量ニトトマルヘカラス、又無ニ増減儀也、（抄 一・一四六頁下）

(b) しかありといへども、野狐皮五百枚、あつさ三寸なるをもて、曾

住此山し、為学人道するなり。（大修行 五五〇頁）

此野狐皮五百枚ア、ツサ三寸ナムト云ニ付テ、殊ナル子細ナシ、只脱落ノ上ノ五百枚、三寸ナルヘシ、五百塵点劫トモ、三千大千世界トモ云程ノ三寸ナルヘシ、広狭多少ニカカハルヘキニアラス、此道理カ曾住此山トモイハレ、為学人トモ被談也、所詮脱落ノ上ノ曾住為学ナルヘシ、（抄 二・四七三頁下）

(a) では、心を識得すれば、心に相對する大地はないのであるから「大地無寸土」「蓋天撲落し而地裂破す」と言われる。そのように心を識得した時には、山河等もすべてが心であるから、「大地さらにあつさ三寸をます」と言われる。先には心のほかに大地はないという視点から「大地に寸土無し」と言ったのであり、今度は大地すべてが心の現成としてあるという視点からすれば、「大地さらにあつさ三寸をます」と言うこともできるのである。しかし、三寸と言っても数量にかわりなく、ただ視点を変えて述べたのであって、大地に増減があるのでないことは勿論である。大地が心にほかならないことをこのように表現したのである。

(b) では「三寸」は三千大千世界の意味に、また五百枚は五百塵点劫の意味に解釈しているが、「広狭多少ニカカハルヘキニアラス」として、特に数量にかかわりないことを示している。

(七) 三・四・五……

(1) 三四枚

不出法性の衆生、さらに法性にあらざらんと擬するちから、たとひ得処ありとも、あらたにこれ法性の三四枚なり。法性にあらざらんと言談祇対、運用施為する、これ法性なるべきなり。(法性四一七頁)

又不出法性ノ衆生、イカニ法性ニアラサラムト擬ストモ、コレ法性ナルヘキ理ヲ、三四枚也トハ云ナリ、言談祇対、運用施為スル、コレ法性ナルヘシト云、文ニアキラカ也、(抄 二・一八九頁上)

法性をのがれようとして力を得たとしても、それもまた法性、即ち法性の三四枚であつて、法性からのがれることとはできないことを述べている。「三四枚」の数量に意味があるのではなく、それも法性にすぎないことを表わしているのである。

## (2) 三五枚

しかあればすなはち、いま四員の達磨、ともに百千万の皮肉骨髓の向上を条条に参究せり。髓よりも向上あるべからずとおもふことなかれ、さらに三五枚の向上あるなり。(葛藤 三三五頁)

達磨ハ一人、門人ハ四人トコソ思程ニ、今ハ四員ノ達磨ト云詞出キタリ、警耳ヤウニ覚ユ、但師資ノ面目ノヤウ、尤四員ノ達磨ト云ハルヘシ、達磨ノ皮肉骨髓ヲ得ルトキハ、皆達磨ナルヘキ也、又髓ハ最結句至極ニテ、此外ニハ向上不可有ト思所ヲ、如シ此被レ積ナリ、実ニモ門人多アラハ、イクラモ、六根ヲモ、身心手足マテモ、サツケラレナマシ、四人アルユヘニ、皮肉骨髓ヲハ被レ授レ之歟、然者実三五枚ノ向上アルヘキ也、三五枚ト

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

云ヘハ、日来存スル三四ノ数ト被ニ心得ヌヘシ、是ハ其数ニカカハルヘカラス、数多ナルヘシ、已下如レ文、無ニ殊子細、(抄 二・四二頁上(下))

達磨は門人が四人であつたからそれぞれに皮肉骨髓の四つを授けたのであつて、この四つに限るのではなく、その数は無限にあるという意味で「三五枚の向上あるなり」と説かれる。『抄』も「是ハ其数ニハカカハルヘカラス、数多ナルヘシ」と積している。「三五枚」は数量に関係なく、数の多いことを表わしているのである。

## (3) 三四五六華裏

三四五六華裏は、無数華裏なり。華に裏功德の深広なる具足せり、表功德の高大なるを開闡せり。(梅華 四六一頁)

三四五六花裏ハ無数花裏也トアリ、名目相違シテ聞ユ、但今ノ三四五六ノ詞、数ノ多少ニカカハルヘカラス、以ニ無数花裏、三四五六ト仕也、(抄 二・二二五頁上)

本文にも「三四五六華裏は、無数華裏なり」と明らかかなように、三四五六は数の多少を表わすのではなく、無数を表わしており、『抄』はその点をより明確に述べている。

## (4) 三頭八臂

向上に道取するとき、作麼生ならんかこれ仏性。還委悉麼。三頭八臂。(仏性 三四頁)

作麼生ナラムカコレ仏性、還委悉麼、三頭八臂トイフハ、ヤカテイカナルカコレ仏性トイフ事ヲノヘタルナリ、イカナラムト

云ハ三頭八臂ナリ、一頭一臂トモサタメサルユヘニ三頭八臂ハ  
タタ、無量頭無量臂ナリ、仏性ノ面ニナリテ、臂トモカシラト  
モ、イハルルナリ、所詮三頭八臂ハ、仏性ノ道理ヲ面面ニトク  
義ナリ、(聞書 一・一二二頁上)

『聞書』には、「イカナルカコレ仏性トイフ事ヲノヘタル  
ナリ」とある。「イカナルカ」とは「いかなるも」の意味で  
あり(拙稿『御抄』の『正法眼蔵』解釈―疑問詞と疑問の助詞に  
ついて―)『駒沢大学仏教学部論集』第八号所収一六九頁参照)、  
「イカナラムト云ハ三頭八臂ナリ」とあるから、「三頭八臂」  
とは「いかなるも」の意味であることが理解されよう。『聞  
書』が、「三頭八臂ハタタ無量頭無量臂ナリ」と述べている  
ことから、三頭八臂とは、三・八という数に意味があるの  
ではなく、ここでは、いかなるものも、これも、それも仏性  
の面であることを表わしていると言える。

(八) 六

六年・一夜

このゆゑに、落草六年、華開一夜なり。(三十七品菩提分法 五  
一八頁)

落草六年トハ、六年苦行事歟、花開一夜トハ、成道ノ時節ヲ指  
歟、所詮六年ハ久ク、一夜ハ暫時也ト不可レ云、落草六年モ、  
花開一夜モ只同事也、長短ニカカハルヘカラス、(抄 二・三  
六二頁下)

『抄』は、落草六年を積尊の六年間の苦行に、華開一夜を

十二月八日あけの明星を見て悟ったといわれる成道に当てて  
解釈し、苦行の六年も成道の一夜も同じであり、長短に関係  
がないとしている。これは、修行と悟りとが同じ、修証一等  
という道元禅師の立場からの解釈であると言えよう。

(九) 七

七尺

而今の髑髏七尺、すなはち尽十方界の形なり、象なり。仏道に修  
証する尽十方界は、髑髏形骸・皮肉骨髓なり。(光明 一一九頁)  
此今ノ髑髏、又凡見ノトクロニ不可レ準也、以三尽十方界髑髏  
ト習ヘシ、今ノ七尺ト尽十方界ト更広狭多少ノ儀アルヘカラス、  
(抄 一・三三七頁下〜三三八頁上)

七尺ト云ハ尽十方界丈尺ナリ、無際限也、不可レ準三世間一尺寸  
也、(聞書 一・三四二頁上)

『抄』で説くように、七尺と尽十方界との広狭を問題とし  
ているのではない。尽十方界が七尺だというのである。それ  
故、七尺と言っても世間で言う七尺ではなく、無際限をここ  
では七尺と言っているにすぎない。

(一〇) 七・八

七尺八尺

(a) いま火爐をみる、たれ人となりてかこれをみる。火爐を見るに、  
七尺にあらず、八尺にあらず。(古鏡 一八五頁)

実此火爐ヲ見ル人、誰人ナルヘキソ、玄沙ノ火爐ヲ見ルカ、火  
爐ノ玄沙ヲ見ルカ、火爐カ火爐ヲ見カノ道理也、又火爐闊多少

ノ詞カ、辺際ナキ道理カ、今七尺八尺ニアラストハ云也、(抄一・四二四頁下)

(b) 玄沙院宗一大師、侍ニ雪峯ニ行次、雪峯指ニ面前地ニ云、「這一片田地、好造箇無縫塔。」玄沙曰、「高多少。」雪峯乃上下顧視。玄沙曰、「人天福報即不<sub>レ</sub>無、和尚靈山授記、未夢見在。」雪峯云、「爾作麼生。」玄沙曰、「七尺八尺。」(授記 一九六頁)

又玄砂ノ七尺八尺ノ詞、是又寸尺等ニカカハルヘキニアラス、火爐闊トアリシ時、七尺八尺ト云シコトハニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違、只同事ナルヘシ、(抄 一・四六七頁上)

(c) 一草一石もし七尺八尺なれば、彼一念も七尺八尺なり、発心もまた七尺八尺なり。(発無上心 五三〇頁)

是ハ先ノ沙汰ノ如シ、此七尺八尺ノ詞、無縫塔ノ七尺八尺程ノ尺ナルヘシ、(發菩提心抄 二・四二〇頁上)

先ず(a)についてである。先には「世界闊一丈、古鏡闊一丈」「世界闊一尺、古鏡闊一尺」とあったが(二)(3)(a)、ここでは「火爐を見るに、七尺にあらず、八尺にあらず」と、火爐の闊さが七尺八尺ではないと説いている。丈尺を用いた同様の表現であるのにこのように肯定と否定とに異なるのは、前者が世界と古鏡の不二同一なることを説くを目的とし、世界の闊さが一丈ならば、古鏡の闊さも一丈であり、世界の闊さが一尺であれば、古鏡の闊さも一尺であると説いたのに対して、後者は、火爐の闊さの辺際なき道理を説くことを目的としているからである。火爐と言っても七尺八尺の闊の火爐ではな

く、無限の闊さを持つ火爐をここでは問題にしているのであるから、「七尺にあらず八尺にあらず」と説かれるのである。

(b)の「七尺八尺」も、『抄』では「火爐闊トアリシ時、七尺八尺ト云シコトハニ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>違」として、(a)と同じ意味に解釈している。即ち七尺八尺といった限られた長さを表わすのではなく、無限定な長さを表わしている。これは、問答が単なる問と答ではなく、両者が同じ立場から述べているという『御抄』の解釈からすれば、「爾作麼生」も問ではなく、「作麼生」という疑問詞は無辺際を表わすことになり、この限定されない雪峯の「作麼生」ということばに対して、玄沙は「七尺八尺」と答えたのであるから、やはりこのことばも、七尺八尺に限られたものではなく、無辺際なることを表わしていると言う解釈が成り立つ。

(c)も『抄』に依れば「此七尺八尺ノ詞、無縫塔ノ七尺八尺程ノ尺ナルヘシ」とあるから、(b)と同じ無辺際という意味での「七尺八尺」と考えてよいであろう。

## (二) 八

### 八両・半斤

(a) この娑婆国土は、釈迦牟尼仏土なるがごとし。この娑婆世界を拈して、八両半斤をあきらかに記して、十方仏土の七尺八尺なることを参学すべし。(十方 四七五頁)

此娑婆世界ト釈迦牟尼仏トノアハヒ、八両八斤<sup>(半)</sup>ト云程ノ道理ナ

ルヘシ、只一物ナル道理也、十方仏土ト、七尺八尺ト、又八両(半)八斤ナルヘシ、(抄 二・二四〇頁下)

(b) 東方を聖礙すといへども、光明の八両なり。(光明 一一七頁)

又東方ヲ聖礙スト云ヘトモ、光明ノ八両也ト云ハ、光明ハ能照ノ光、東方ハ所照ノ土トノミ、思習ハシタルヲ、今ハ此東方ヲ光明ト談スル所ヲ、光明ノ八両トハ云ナリ、能照ノ光明、所照ノ土カ、共ニ光明ナルユヘニ、八両トハ云ハルル也、其故ハ十六両ヲ一斤ト云フ、八両ハ半斤ナリ、八両与ニ半斤一ハ、只同事也、ユヘニ東方与ニ光明、只同シキカユヘニ、光明ノ八両トハ云ナリ、(抄 一・三三四頁下〜三三五頁上)

(c) 仏性空を道取するに、半斤といはず、八両といはず、無と言取するなり。(仏性 一九頁)

(前略) 八両半斤トハ同キ員ヲ云也、空ト無トヲナシカラネハ、八両トモイハストナリ、(聞書 一・四九頁下)

両・斤は衡を表わす単位であり、十六両が一斤に相当するから、八両は半斤といふことができる。即ち、八両と言っても半斤と言っても、表わし方が異なるのみで、同じ衡を表わしていることになる。そこで、八両と半斤とを用いて、異なる二者の不二同一なることを表わす表現としていっているのである。(a) は此娑婆世界と釈迦牟尼仏との間が「八両半斤ト云程ノ道理」。即ち不二同一であることを表わしており、『抄』はその点を明解に解釈している。

(b) には「半斤」の語はないが、『抄』に依れば、「東方与ニ光明ハ、只同シキカユヘニ、光明ノ八両トハ云ナリ」とあるか

ら、八両の語が、東方万八千仏土と光明とが同一であることを表わしていると言える。

(c) は以上の二つとは異なり、「半斤といはず、八両といはず」と否定になっているのは、空と無とが同じではないことを表わしているからである。

(三) 八・九・十

八九成・十成

(a) 不相待は為法なり、不相对は法為なり。不相对ならしめ、不相待ならしむるは、八九成の道得なり。(海印三昧 一〇四頁)

不相对ナラシメ、不相对ナラシムルハ、八九成ノ道得也トハ、不相待詞モ、不相对ノ言モ、トモニ満足ノ道得也ト云心ナリ、八九成ノ道、十成ニ及ハサレハトテ、不足也ト不可レ云、満足ノ詞也、(抄 一・二八五頁下)

(b) (前略) 道吾曰、「汝作麼生会。」雲巖曰、「遍身是手眼。」道吾曰、「道也太殺道、祇道得八九成。」(観音 一六九頁)

是ハイヒヨセタレトモ、猶不レ及ニ十成ニユヘニ、八九成ノ道ハ、十成ニ猶不レ及ト云タルヤウニ聞ユ、是又シカアラス、人ノ十人シテ持上ヘカラム物ヲ、七八人シテ持上タラハ、弥イカメシキ、力量ニテコソアルヘケレ、其定ニ十成ナルヘキ事ヲ、八九成ナラムハ、今一重力量モアリヌヘシ、但是ハ八九成十成、更勝劣アルヘカラス、不レ始ニ于今一事也、(抄 一・三八八頁下)

(c) みづからが心を挙げて修行せしむ、身を挙げて修行せしむるに、機先の八九成あり、脳後の莫作あり。(諸悪莫作 二七八頁)

八九成モ不足ノ員ニハアルヘカラス、十成ヲ非レ可レ期也、(聞

書 一・六六五頁上)

(d) この相・性・体・力等を、果・報・因・縁等のあひ罣礙するに一任するとき、八九成の道あり。この相・性・体・力等を、果・報・因・縁等のあひ罣礙せざるに一任するとき、十成の道あり。

(諸法実相 三六六頁)

八九成、十成道、カスノ多少ニアラス、只罣礙罣ノスカタヲ、八九成トモ十成トモ云也、(抄 二・一〇七頁下)

(e) この道取、いまだ十成の志氣にあらず、わづかに八九成なり。たとひ八九成をゆるすとも、いまだ八九成にあらず、十成をゆるすとも、八九成なきものなり。(大修行 五五一頁)

如<sub>二</sub>御釈<sub>一</sub>、十成ニ非ス、八九成也ト云へハ、猶<sub>二</sub>満足<sub>一</sub>、不足ナル心地ス、祖門ニ仕フ所ノ十成八九成ノ道理事旧ヌ、所詮十成与<sub>二</sub>八九成<sub>一</sub>総勝劣多少ニカカハリタル詞ニアラス、ユヘニ如此云也、十成ノ時ハ八九成アルヘカラス、八九成ノ時ハ十成ユルスヘカラス、サレハコソ、十成与<sub>二</sub>八九成<sub>一</sub>勝劣ナキ儀モアラハルレ、(抄 二・四七五頁下)

(f) 大道十成するとき、説法十成す。(無情説法 三九七頁)

大道十成トハ、大道トハ、今ノ仏法ノ理ヲ指歟、十成トハ、満足円満ノ心地也、大道十成セハ、説法モ十成スヘキ理必然ナリ、此大道カ説法ナルユヘニ、(抄 二・一四五頁下)

十成とは(f)にあるように「満足円満」なること、完全なることを言うのであるが、『正法眼蔵』では十成よりも八九成の語が多く用いられるようであり、ここに上げた用例もその一部分である。十成に対して、八九成と言え、(b)「猶不<sub>レ</sub>及ト

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

云タルヤウニ聞」えるが、『御抄』はそのようには解釈してはいない。(a)「八九成ノ道、十成ニ及ハサレハトテ、不足也ト不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>云、満足ノ詞也」、(b)「八九成十成、更勝劣アルヘカラス」、(c)「八九成モ不足ノ員ニハアルヘカラス、十成ヲ非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>期也」、(d)「八九成、十成道、カスノ多少ニアラス」、(e)「十成与<sub>二</sub>八九成<sub>一</sub>勝劣ナキ儀モアラハルレ」と、どの用例も、八九成と言っても十成に満たない、不完全という意味ではなく、八九成と十成とは同じで、八九成が既に完全であることを表わしていると解釈している。では、いかなる理由により十成と八九成とが同じだと言えるのであろうか。それを『抄』では、(e)「十成ノ時ハ八九成アルヘカラス、八九成ノ時ハ十成ユルスヘカラス」と述べているが、これは「一方を証するときは一方向はくらし」の論理による解釈と言えよう。と言うことは、十成というものを置いて、それに対して八九成と言っているのではなく、八九成は八九成で完全であると言える。これは、先に「許多手眼の一二なるべし」の一二を、『抄』が許多手眼には及ばず、わずかに一二であるという意味に取らないで、全一全二の意味に解釈していたのと通ずるものであると言えよう。

(三) 九

九九

正精進道支とは、袂出通身の行李なり、袂出通身打人面なり。倒

騎仏殿打一市、兩市三四五市なるがゆゑに、九九算来八十二なり、  
(三十七品菩提分法 五一七頁)

(前略) 九九八十二ト云詞モ、世間ニハ異ナルヘシ、但是モ九  
九八十一ト云ハ、凡見ナルヘシ、非レ可レ用、倒騎三仏殿打二  
匣ノ方ヨリ算来スレハ、八十二トモ、三トモ、乃至百千無量  
トモ云ハルヘキ也、詞ニモ数量ニモ非レ可レ滞、(抄 二・三六  
一頁上)

九九八十二トイフ、世間ニハ九九八十一トイフ、今一増シテイ  
フ、不レ被ニ心得、但解脱ノ後ハ八十二ト仕ヘシ、九十一トモ云  
ヘシ、カスニカカハラサルユヘニ、(聞書 二・三八三頁下)

「九九八十一」であるべきが、「九九八十二」とある。『抄』  
は、「九九八十一ト云ハ凡見ナルヘシ、非レ可レ用」とし、『聞  
書』は、「解脱ノ後ハ八十二ト仕ヘシ、九十一トモ云ヘシ、カ  
スニカカハラサルユヘニ」と釈している。これよりすれば、  
「九九八十二」は、何ものにもとらわれない、自由な解脱の  
境界を述べたものであると言える。

(四) 百・千・万

(1) 百雑碎

玄沙道の百雑碎は、道也須是恁麼道なりとも、此来責爾、還吾碎  
片来如何、還我明鏡来なり。(古鏡 一七九頁)

百雑碎ト云ヘハトテ、一鏡カクタクタトワレタルヤウニ不レ可ニ  
心得、古鏡ノ理ノ千變万化スル道理カ、百雑碎ト云ハルルナリ、  
又於ニ物上、百雑碎ト談セムモ不レ可ニ相違、破鏡不重照ノ破  
鏡ヲ談セシカ如シ、(抄 一・四一二頁下)

「百雑碎」といえば、粉微塵なること、鏡ならば鏡が粉々  
にこわれてしまったことを言うのであるが、ここではそうで  
はない。いかなるものも古鏡であるという上からいえば、万  
法がすべて古鏡であつて、古鏡でないものはないから、「古  
鏡ノ理ノ千變万化スル道理カ、百雑碎ト云ハ」れるのである  
う。

(2) 十万八千里

もし人ありて恁麼とはん、空と地と、あひさることいくそぼくぞ。  
恁麼問著せんに、かれにむかひて恁麼いふべし、空と地と、あひ  
さること十万八千里なり。(恁麼 一六四頁)

空与談セムトキハ全空、地ト談セムトキハ全地ナルヘシ、是ヲ  
空与レ地相去ル事、十万八千里トハ云ナリ、此十万八千里ノ詞  
モ、丈尺等ニカカハルヘカラス、無縫塔ノ高サヲ、七尺八尺ト  
云ヒシカ如シ、世界ノ闊一丈等云程ノタケ也、(抄 一・三七  
四頁上)

「十万八千里」は、空と地との間を表わす距離として用い  
られている。『抄』は、「空与談セムトキハ全空、地ト談セム  
トキハ全地ナルヘシ」と註釈しているが、これは一方究尽を  
表わしている。このことと、空と地が隔っていることを考  
え合わせると、『正法眼蔵』中の一つの語を思い起こすであ  
ろう。「天地懸隔」がそれである。天地の隔たりがあるとい  
う表現によって相対する法が隔てられ、相対する法を隔てる  
ということによって、そこには相対する法のないこと、即ち

一法のみであること(一法究尽)を表わしていた(拙稿『御抄』の『正法眼蔵』解釈―否定的表現について―)『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三五号所収 三〇四頁)。この「十万八千里」も、空と地との間が実際に十万八千里あるのではなく、空と地とがまったく隔っていることを表わす語と考えてよいであろう。それ故『抄』も、「此十万八千里ノ詞モ、丈尺等ニカカハルヘカラス」と註釈している。

### 三 おわりに

以上「数量表現」について見てきたのであるが、以前に述べた否定的表現や打返の表現等のように、『御抄』の解釈の特徴を明確に指摘することはできない。なぜならば、用いられる数字に依って、或はその単位に依って、特にある一つの意味に分類できるわけではないからである。しかし、あえて言うならば、「一」は二者の不二同一、或はそのもののみであることを表わし、他の数量は、特にその数量に意味があるのではなく、無量なる意味を表わす場合が多いようである。一般に『御抄』は、数量に対して、その数字に囚れることなく自由な解釈を行っているが、そこに、ある一定の公式のよきなものを見い出すことはできない。だが、以上見てきたように、数量に関する表現は非常に多くあるのであるから、それらを『御抄』がどのように解釈しているかを考察すること

は、『御抄』を通して『正法眼法』を理解する上からは、決してむだなことではない。

(一九七八・七・二三)

(昭和五三年度文部省科学研究費奨励研究による研究成果の一部)